
夢見のゴスト

杏羽らんす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見のゴスト

【Nコード】

N6013Y

【作者名】

杏羽らんす

【あらすじ】

言葉をまったく話せない代わりに、テレパシーを扱うことができる人類の変異種『ゴスト』を研究する施設が謎の男に襲撃された。その際に重要な観察対象だったある少女が脱走し行方不明になる。平凡な高校生の叶宇は偶然その少女を発見し、生活を共にすることになる――。

研究員が男の侵入に気づいたのは、身体を自由を奪われてしまった後のことだった。

侵入者は研究員の正面に立っている。

細型のサングラスをかけ、黒髪を後ろへ流すように逆立てていた。足元近くまである長い黒コートを羽織り、服も靴も、身に纏うすべてのものが黒だった。

研究員はその男に胸倉を掴み上げられ、もう片方の手で頭を鷲掴みにされている。

外見上の拘束はただそれだけで、何かしらの道具で四肢を抑えられているわけではない。

それなのに研究員は身動きをとることができなかった。

というのも、動けない原因は研究員の身体の内側にある。――頭痛だ。男に後頭部を鷲掴みにされた直後から、研究員の脳内には激しい痛みを引き起こす不快なノイズが鳴り響いているのだ。

それは音として、映像として研究員の意識を蹂躪する。じゅうりゃく

例えば、ヘッドホンで無理矢理に大音量の非常ベルを聞かせられているかのように聴覚が乱打される。眼球を指で押しつけられるような激痛と、視界の乱れを感じさせられる。

異常だった。

とても、身動きがとれるような状況ではなかった。

それでも、研究員はなんとか余力を振り絞り、口を開く。意識を
むしばむノイズのせいで、輪郭もおぼろな正面の男に問う。

「き、貴様……、な、何者だ……？」

男は、研究員を拘束する姿勢はそのままに口だけを動かして、

「ふん。無駄なことを聞くんだな。俺の名を知ったところで、お前
にはどうすることもできねえよ」

落ち着きのある低い声だった。

「それに、あいにくだが俺はもう本名を名乗らないことにしている
んだ。今の俺は——」

研究員の頭を鷲掴みにするその手に、一層強く力が込められる。

万力で締め付けるかのような痛みと、より激しいノイズが研究員
の脳内を駆けた。

「——ハメド。それで通している」

直後。

悲鳴をあげることすらできぬまま、研究員はその場に倒れ伏し、
意識を失った。

全身を黒の衣服で固めた男——ハメドはしゃがみ込み、意識を失ってうつ伏している研究員の肩を乱暴に掴むと身体を反転させた。仰向けになった研究員の白衣の内ポケットへと手を伸ばし、中を探る。

「さて、と……。おー。あつたあつた。メインルームのカードキー
つと」

ハメドは立ち上がり、手にしたカードキーをまじまじと眺める。カードには『バレラ社』という社名が記されていた。

ここは、日本有数の規模を誇る製薬会社『バレラ社』の地下に極秘裏に設けられた研究施設の一角だった。ここではある特殊な人類についての研究が行われている。

「そんじゃあ……。囚われのお姫さまを助けに行くとするか」

につと口の端を上げ、ハメドは部屋の奥へと進む。

この研究施設の構造は主にデータ管理などを行うサブルームと、その奥にある実際に研究・実験を行うメインルームとの二つから成っている。ハメドが今いるのはそのうちの、サブルームである。

壁面に並ぶ大きなモニター画面やいくつものコンピュータ機器を通り過ぎ、大きなスライド式のドアの前に立った。この先に研究施設のメインルームがある。

「研究所を襲撃しようって奴が律儀に正面のドアを開けて入ってくるってのも滑稽だなあ」

ふんと小さく鼻で笑い、

「まあ、仕方ねえ」

ドアに手を当ててみる。重厚な金属で作られているため、人間の力ではとてもじゃないが打ち破れない。

そして当然のことながらドアにはロックがかかっている。

しかし問題はない。すぐ脇の壁面には、それを解除するためのカードリーダーが取り付けられている。

ハメドは研究員から奪っておいたカードキーを装置の溝にあてがい、すつと通した。

カードを認識した合図の電子音が鳴り、カードリーダーにとりつけられた電子画面がチカチカと点灯する。

程なくして、その画面に黄色い『1』から『9』までの数字が表示された。

「しまった。そうか、暗証番号か……」

顔をしかめ、ハメドは後方で倒れている研究員を見る。

「ちつ……。番号も聞き出しておけばよかったか。でもまあ――」

気を取り直し、再度カードリーダーに向き直ると、

「こいつがああ頃のままなら、たぶん番号は……」

ハメドは黒の革手袋をした指で自分のこめかみを叩きながら、もう片方の手でタッチパネルの数字を押していく。

入力し終えたところで確定のボタンをタッチした。

九つの数字が消え、代わりに『wait...』の文字が表示される。

数秒後、点滅を経て画面は消灯し、ドアがゆっくりとスライドした。

「よし。大当たり」

ハメドはカードキーをコートのポケットにしまうと、部屋の中へと足を踏み入れる。

全体的に白を基調とした部屋だった。

研究のメインルームというだけあって非常に広い。

ただし、いくつものコンピュータ機器やデスクが並び、配線も多いため、印象としては狭苦しさを感じる。ゴーというくぐもった音が鳴っているが、これは機械の作動する音や部屋の空調の音だろう。

ハメドは身を隠すような素振りは一切せず、堂々と中へ進んでいく。

室内にいる研究員は、見たところ四・五人と少ない。そして、その誰もが自身の研究に集中しているのか、それとも誰がやってきたかなど端から興味がないのか、まだハメドの存在に気付いていない。

ハメドは辺りを見回しながらさらに歩を進めた。

研究室の壁面には、至るところに嵌め殺しの大きなガラス窓が設けられており、その向こう側は実験を執り行うための個室になっている。

中の様子を遠目に見る限り、そこに目的の人物はいないようだ。

「ちつ。このまま当てもなく探しても、らちがあかねえか」

舌打ちをしながらぼそりと呟くと、おもむろに、ハメドは目に付いた研究員の背後に立ち、肩を叩く。

そして声をかけた。

「お忙しいところ、すみません」

言葉の文面とは裏腹に、どすと利かせたその声には相手を威圧するふてぶてしさが滲み出ていた。

「ん……？ 何か用かね。今は忙し——う、っわぁ！」

研究員が振りかえると同時、ハメドは白衣の襟元を掴み、強引に持ち上げて相手を宙吊り状態にした。

突然発せられた大きな声に、やっと他の研究員たちもハメドの侵入に気がついたようだ。

「おい！ 貴様、いったい何をやっているんだ！ ここがどういう場所なのかわかっているのか！」

研究員のうちのひとりが声を荒げた。

にわかにその場にいた数人の研究員たちも近寄ってくる。

しかし彼らがハメドに恐れを感じているのは明白だった。

突如現れた黒衣の男が同僚を宙づりにして何か脅迫している様子を見れば、知識だけが強みのか細い研究員が委縮してしまうのは当然だろう。

「ここがどこか、ね。製薬会社バレラの地下研究所だろ。ゴストの研究をしている場所だ。はい正解。で、正解者には何か商品でも出るのかい」

知っていて当然とでも言いたげなハメドの返答に、研究員たちは驚きを隠せない様子だった。

しかし彼らがそのような反応をするのも無理はない。この地下研究所は秘密裏に建設されたものであり、存在を知り得るものはバレラ社の一部の人間に限られるからだ。

と。ハメドに襟を掴み上げられたままの研究員が、苦し紛れに問うた。

「ぐ……貴様……何者だ」

ハメドは思わず、笑いに顔を歪ませた。

「おいおいその質問ならさつきもされたぜ。ここの研究員は、侵入者が現れたら自己紹介をしてもらいましょうなんて教育でも受けているのか？」

鼻で笑うように言い捨て、ハメドは名乗らぬまま、ここへ来た目的だけを告げる。

「——『G・V01』はどこにいる」

「はっ……？」

研究員は目を大きく見開き、頬を引きつらせ、顔色を悪くする。隠しことをしている人間が核心を衝かれたときにする顔だ。

「ここで研究しているゴストの実験体に『G - v 0 1』というコードの奴がいるだろう。そいつはどこにいる」

「な、なぜ、そんなことを、知っている……？」

「いいから教える。答えないなら死ぬことになるぞ。お前の代わりなら、いくらでもいるんだぜ」

そう言つてハメドは後ろで怯えている他の研究員たちへ目配せしてみせた。

「し、しかし……」

研究員は口ごもった。

答えるのを渋っている。ハメドから逸らした視線は他の研究員たちへ向けられていて、助けを請うているようだった。

だが、他の研究員たちは突然の事態と恐怖にどういった行動をとればいいのか決め兼ねているらしい。ただ二人の姿を見つめ、恐れ慄くばかりだ。

「残念だ」

溜め息とともに呟くと、ハメドは空いている方の手で研究員の頭を鷲掴みにし、力を込めた。

これはただ頭を掴んで圧迫しているわけではない。

こうして触れることによってハメドの身体から研究員に向かって特殊な波長が送信される。それは強烈なノイズとなつて相手の脳内を刺激し、精神を食い潰す。これが、ハメドの持つ特殊な力だった。

「うっ……」

苦痛に顔を歪めた研究員の両腕が何かを拒むように上がる。
そしてハメドの腕を掴んだが、すぐさまそれは力無くだらりと落ちてしまった。

その光景を見て、他の研究員たちはさらに怯える様相を強くする。

ハメドが両手を放すと、研究員はばたりとその場に倒れ込んだ。

「気絶しただけだ。殺しちゃいねえ。で……次はどいつの番だ」

「そ、その力……そうか、お前は」

研究員のうちのひとりが言いかけたが、遮るようにハメドが、

「次はお前か」

彼に近寄り、

「答える。『G - v 0 1』はどこにいる。言わないならここにいる奴らを全員潰してからじっくり探すだけだ。黙っていても良いことはないぞ」

ハメドの凄みはサングラス越しでも尚、その恐ろしさを伝えるのに十分な圧力を持っていた。

「……そ、その奥の、一番、端にある観察室だ。他の実験体とは違って、『G - v 0 1』は重要観察対象としてそこに幽閉している」
研究員がメインルームの隅を指さす。

部屋の角に少し奥まった部分があり、その最奥に個室がある。目当ての少女はそこにいるらしい。

「オーケー、了解した。素直なことは良いことだ。寿命を長くする」

ハメドは彼らに背を向け、研究員の示した場所へ向かう。

個室のドアの横には長方形のプレートが貼られており『G・V0
1』と書かれている。ここで間違いないようだ。

ドアは金属製のもので小窓がついていた。中の様子を観察できるらしい。

覗いてみると、暗くてわかりづらいが確かに人がいる。

ハメドはドアを開けることにした。鍵による施錠ではなく、かんぬき門となっているため外からなら自由に開閉ができる。

ギイという重い音をさせながら、ドアがゆっくり開く。

中に、ひとりの少女がいた。

暗い個室の中、ぺたりと床に座り、ぼうつとした目でハメドの姿を眺めていた。外見は非常に幼く見える。

「よう、はじめまして。俺はハメド」

「……………」

驚いているのか、恐れているのか、それとも別の感情なのかはわからない。少女は無言のまま、ただハメドを見つめていた。

ハメドも彼女のことをじっくりと観察するように眺めてみることにした。

儚さを感じさせる銀色の長い髪と、小柄で華奢なきゃしゃ体躯が彼女の弱々しさを表しているようだった。

着ているものは彼女の身体に対しては大きめの白いシャツが一枚のみ。

右足には金属の輪が取り付けられており、そこからチェーンで壁と繋がれている。研究員の「幽閉している」という言葉を思い出したが、まるで囚人のようだ。

とても人間としての扱いを受けているようには見えなかった。

「ずいぶんとまあ……酷い扱いだな。観察対象ってことらしいから、とくに厳しい実験に晒されているわけではないんだろうが」

言いながらハメドは少女に近寄る。

「……………」

少女は何かを言いたそうに表情を変える。しかし、言葉を発することはない。

「ああ、いいていいて。喋ることができないのは知っている。ゴストは言葉を話せない、ってな。でもってテレパシーもまだ使えないんだろう？」

そう言いながら少女の横を通り過ぎ、ハメドは壁に繋がれたチェーンを握った。

片足を壁に押し付け踏ん張ると、両手で思い切り引っ張った。

ガコッという鈍い音をさせて、チェーンと壁を繋ぐために取り付けられた平板が外れ、同時にネジが飛び散る。

まだ少女の足には金属の輪とチェーンが付いたままではあるが、とりあえず少女の拘束を解いた形になる。

「どうだい、助けにやってきた正義のヒーローって感じだろう」

軽口を言ってみるが、突然現れた男の行動に恐怖を感じたのか、少女は少し身を後退させてしまった。サングラスをかけ、全身を黒い服でまとめたハメドの風貌にも原因があるかもしれない。

「しまったなあ。第一印象で怖がられちゃったか。まあ、心の距離はあとで縮めるとして……」
振り返る。

室内にはいつの間にか警備服を着た男たちが数人やってきていた。研究員のうちの誰かがハメドの侵入を連絡したのだろう。

「まずはここの脱出が優先だ」

ハメドは少女を脇に抱えた。

少女は怯えた顔をしてハメドを拒んでいるが、それでも言葉を発することはない。

「悪いな。ちよつとだけ我慢していてくれよ」

ハメドは走り出した。

警備員たちの存在など気にしないかのように、一気に研究室のメインルームを駆け抜ける。

掴みかかってくる警備員には椅子を蹴飛ばして動きを止め、殴りかかってくる警備員の拳は巧みな体捌きで回避する。

研究室の出入り口付近まで来たところで、最後の警備員がハメドの前に立ちはだかった。恰幅のいい中年の男だった。

「待て！ 黒服に身を包んだ男……侵入者というのは貴様だな！」

ハメドはいったん足を止め、そして冷静に思考する。

（……まだここへ来てそんなに時間は経っていない。こいつは警察じゃなく、バレラ社の常駐警備員つてのが妥当だろう。ならば、たいした武器は持っていない）

ハメドは、ちらと後方へ目をやった。

やり過ごした警備員たちが立ち上がり、距離を少しずつ縮めてきていた。

前方も、後方も通路は塞がれている。

「そして、あまり時間はない——と」

すぐさまハメドは次に自分の取るべき行動を決定した。

正面突破だ。

臆することなく駆けだしていく。

「ここは通さんぞ！」

待ち構える警備員は片手に持った警棒をハメドに向かって振り上げた。

ハメドは止まらない。

勢いよく垂直に振り下ろす相手の攻撃に対して、斜めに踏み出し、相手に半身を向けるような構えになることで警棒をいなす。

「ずいぶんと素人くさい動きだな。そんなんでも務まるのか。警備員つてのは——」

挑発しようとしたが、口を噤む。

警備員は振り下ろした方の警棒とは別に、もう片方の手にも警棒を構えていた。

一回目の攻撃はフェイクで、この二回目の攻撃が本命だったとい

うことになる。

「おいおい、二刀流かよ。そいつはちよいとフィクションの見過ぎだぜ」

身体を傾けたために身動きの取りにくくなった状態のハメドの顔面に向かって、警備員は警棒を水平に打ち払う。

警棒はハメドの顔面を横殴りに捉え――

「残念。しかし攻撃は当たらないのだった」

捉えることなく、空を切った。

ハメドは身体を傾けた状態からさらに上半身が床と平行になるくらいまで極端に背を反らしていた。それも少女を脇に抱えたままで。警棒はハメドの身体の上を虚しく通過していく。

「そんな、馬鹿な。こんなこと出来るはずがない……！」

啞然としている警備員を前に、ハメドは悠然と身体を起こした。そして警備員の顔を見据え、にやりと笑う。

「人間だって鍛えりやこれくらいできるさ。やればできる。何でもな。まあ俺の場合、もう半分くらい人間じゃなくなっているがね」

ハメドは一直線に拳を突き出した。

ハメドの革手袋には、拳を握り込んで殴った際に相手に当たる部分――いわゆるナックルパートの部分に鉄製のプレートが取り付けられている。

拳は真正面から警備員の顔面を捉えた。

相手の鼻骨が碎ける感触が拳に伝わる。

警備員は警棒を落とし、両手で顔を押さえながらその場にしゃがみ込んだ。

「骨折ならそのうち治るさ。悪く思っなよ。こつちも捕まるわけにはいかないんでね」

ハメドは少女を抱えたまま警備員の脇を駆け抜け、メインルームを後にした。

ハメドはさらに走る。

地下を脱出し、階段を駆け上がりビルの一階へ。

さらに通路を走り抜け、ビルの外へと出たところで、出口で待ち構えていた何人もの警備員に取り囲まれた。

「動くな！ このまま逃げられると思うな！」

ハメドは足を止めた。舌打ちをして、

「順調にいったってのに、ここへ来て囲まれた……か。——いや、なるほど。地下に来た警備員が少なかったのは、俺がビルから出て

きたところを大勢で一気に押さえ込むための人員削減だったってことか」

半円を作るように陣形を取った警備員たちが、じわじわとその円を狭め、距離を詰めてくる。

「さすがに、こいつは……お手上げだな」

先程のように一対一ならともかく、これだけの人数が相手で、なおかつ少女を抱えていてはハメドにも手の出しようがない。

「さあ！ そいつを離せ！」

警備員のうちのひとりが叫ぶ。

ハメドはゆっくりと少女を地面に下ろした。

「よし。いいか、変な気を起こすなよ！ そのまま両手をあげろ！」

言われた通り、両手をあげつつ、この状況で次にどう動くべきかを考え始めた。

そのときだった。

『——こわい、こわいよ——』

脳内に声が響いた。

どこか定まった場所から聞こえてくる声というわけではなく、脳内に直接流れ込んでくるような不思議な声だった。

「な、なんだ、今の声は！？ 誰か隠れているのか！」

警備員のひとりが叫んだ。

不思議な声は、ハメドだけでなく他の警備員にも聞こえたようで、困惑している者、不穏な顔をする者、怪訝そうな顔をする者、全員が戸惑い、空を見上げてみたり、辺りを見回してみたりしている。

「貴様、何か妙なことをしたのか！」

いきり立った警備員のひとりが前へ出る。

『——こないで、こないで……——』

再び、声がした。

先程と同じく脳に直接流れる不思議な声だ。幻聴ではないことを確信し、警備員たちはさらに戸惑いの色を強くした。

（まさか——）

ハメドには心当たりがあった。

それはハメドのすぐ近く。

怯えたまま地べたに座りこんでうずくまる少女を見る。

（——まさか、こいつが？）

ハメドは少女へ手を伸ばし、触れようとした。
そのとき。

『——やめてえっ！——』

三度目の声がした。

しかしそれは先程までのものとは似て非なるもの。
ハメドの脳の中を、声だけでなく電流が走るような痛みと衝撃が襲う。

脳内に、奇妙な波長が流れ込んでくる異物感が充満していく。視界がチカチカと明滅を繰り返し、意識が遠のいていく。その感覚の正体にハメドは気づいたが、既に手遅れだった。

ハメドも、警備員たちも。

声が出た次の瞬間、そこにいるすべての人間が意識を失い、その場に倒れ伏した。

ただひとり、その少女を除いて。

よそみや かなう
四十宮叶宇が公園へやってきたのは、ちょうど午後の一時になる
うかというときだった。

叶宇の通うA**高校はこの日——七月二十日から夏休みに入
った。

叶宇は優等生という訳ではないが、夏休みの課題は早いうちに終
わらせようというタイプで、いくつが出されている課題のうち、夏
期研究課題というものにまず手を付けることにした。

夏期研究課題というのは、いわゆる自由研究である。

特に具体的な研究項目は提示されておらず、自分の興味のあるも
のについてレポートを作成するというものだった。

「これは桔梗の花か。それでこっちは——」

花の観察が好きな叶宇は、街にどんな花が咲いているのか調査し、
その花の具体的な特徴や性質などをレポートにまとめようと考えて
いた。

ただし街に咲いている花といっても、都市開発の進みつつあるこ
の地域では、花の咲いている場所も限られてくる。

そのため、複数種類の花が咲いているであろう場所として、この
A**公園を選んだのである。

しかし——

「これは、さつき見た花だ。うーん。思ったほど、色々な花が咲い
ているわけじゃないんだなあ。さすがに二、三種類の花について書

くだけじゃレポートとして不充分だろうし……」

独りごち、叶宇はベンチに腰かけた。

もう公園の中はだいたい見てまわったが、本数としては多くても種類としては同じということが多く、レポートの材料としては不充分だった。

今のところ、見つけた花の種類は三つほどである。

予定としては公園内だけで二桁に届く程度の数は見つけたいと思っていた叶宇にとって、この数字はあまり芳しくないものだった。

思っていた通りに花が見つからず、早々にもテーマを変えようかなどと考える。

ぼうつと、特に何を考えるでもなく公園の様子を見回す。

叶宇の通うA**高校だけでなく、他の高校や中学校も今日から夏休みだろう。というのに、公園の中にはそれほど人の姿は見受けられない。公園で遊べる内容などが知れているし、中学生、高校生ともなればもっと他の娯楽があるのだから公園に人が少ないのも不思議なことではないが。

「よし、それじゃ再開」

数分の休憩の後、叶宇はベンチから降り、公園内の散策を再開した。

ただし散策といっても極端に広い公園ではないため、まだ見えない場所はほとんど残っていない。

「まだ奥の林は見えていなかったっけ」

公園の奥に隣接している雑木林の方に行ってみることにした。決して大きな林ではないが、緑があるぶん、花も多いだろう。

公園と雑木林とを仕切るフェンスの前に立つ。

向こう側には緑で覆われた空間が広がっている。

フェンスの一部にはドアのように開閉できるところがあり、そこから中へ入ることが可能となっている。

叶宇は戸を開くと、雑木林へと入っていった。

辺りを観察しながらゆっくり歩いていく。思っていたほど木の密度は濃くなく、太陽の光も充分に差し込んでいる。

雑木林というと鬱蒼とした森に近いようなイメージを叶宇は持っていたが、ここはむしろ開放的な空間に適度に緑が植えられているような感じで、非常に清々しい場所だった。

そんな風にして雑木林の中程まで進んで――

そこで、ひとりの少女を見つけた。

木のほとんどない開けた場所だった。

太陽の光がまるで神聖な者に対する演出であるかのように注ぎ込まれている。地面には背の低い草が天然のカーペットのように柔らかく広がっている。

だから、光を浴びて穏やかに眠る少女が、叶宇には森の妖精のように見えた。

その少女は地べたにぺたりと座り、周囲にある木の中でもひときわ幹の太いものに上半身を預けるようにして眠っている。

幻想的な印象を受けた理由は他にもあった。

どこか儚さを感じさせる銀色の長い髪。弱々しい小柄で華奢な身体。光の中に消えてしまいそうな白い肌。まばたきをしてしまえば次の瞬間にはいなくなってしまうんじゃないか。そんな気さえした。

しかしその少女には妙な点もいくつかあった。

たとえばそれは、少女の衣服が膝上まで丈のある大きな白いシャツ一枚だけということ。そのシャツや頬が微かに土で汚れていること。

そして、そもそも何故こんな小さい子がひとり雑木林の中などで眠っているのかということ。

もしかしたら友達とかくれんぼか何かで遊んでいて、隠れているうちに眠ってしまったということも考えられるが、公園には他に子どもはいなかったはずだ。

もちろんこの雑木林の中にも他に誰かいるような気配はない。

少女の身体がわずかに動いた。

そして少女は目を開く。

目の前にいる叶宇を見て、少し驚いたような表情をしていた。

可愛らしい丸い目を大きく開き、ぼうつと口を半開きにして叶宇を見つめている。

「……………」

そのまま数十秒が経過した。しかしその間に少女が何か言葉を発することはなかった。

少女の様子に戸惑いながら、叶宇は、

「あ、あの……こんなにちは」

自分でもわからないうちにそんな挨拶をしていた。

「……………」

少女は不思議そうな顔で叶宇を眺め、わずかに首をかしげる。

「えっと、ぼくは叶宇。君はひとり？　遊んでいて迷子になっちゃったのかな？」

何かコミュニケーションは取れないものかと思い、叶宇は話しかけた。

このまま雑木林の中に少女をひとり残して去るのは気が引ける。

迷子であれば警察に届ける必要があるし、そうでなくとも雑木林ではなく公園の中に連れて行くくらいのことはしてあげたいのだが。

「……………」

しかし少女は依然として無言のまま、不思議そうに叶宇の顔を眺めているだけだ。

決して怯えている様子ではないのが幸いだが、何かしらの具体的な反応が欲しいというのが叶宇の本心である。

と、少女は身体を木の幹に預けるようにしながらゆっくりと動き出した。

ひ弱そうな細腕と足で身体を支えつつ、立ち上がる。

自然と少女の手足へと視線がいった。

とくに持ち物などはないらしい。そして素足で――

「えっ……?」

叶宇は思わず声を漏らした。

その原因は少女の右足にある。

先程までは草木の陰になっていて気がつかなかったが、少女の右の足首には拘束具のような黒々とした金属の輪が取り付けられていた。さらに、その輪には鎖までついている。

それはまるで奴隷や囚人のような――

何かおかしい、と思った。

とてもじゃないが遊んでいて迷子になってしまったとは思えられなかった。その格好にしろ、足の鎖にしろ。

叶宇は少女に近寄っていく。

同時に、少女も叶宇の方へ近寄ろうとしたのか前へ出て、しかしバランスを崩してしまった。ふらふらと少女はよろめく。

「あ、危ない!」

叶宇は急いで駆けより少女の身体を抱きとめる。

驚くほどに少女の身体は冷たかった。

どこか具合でも悪いのだろうかとさらに心配になる。

叶宇の胸に顔を押し当てるようにして少女はしがみついている。

「怪我はない? どこか具合でも悪いの?」

問いかけると少女は顔を上げた。まじまじと叶宇の顔を見上げている。

「……………」

一瞬、ほほ笑んだような気がしたが、そのまま少女は静かに目を閉じた。

そして再び頬を叶宇の胸に押し当てる。

安心したように、少女は静かな寝息を立てていた。

少女の身体は非常に軽く、あまり腕力のない叶宇でも軽々と抱き上げられるほどだった。

叶宇は眠ってしまった少女を公園へ連れて行き、ベンチに寝かせてやることにした。

警察に知らせようかとも思ったが無闇に事を大きくするのもよくない。まずは様子を見ることにしたのだ。

ベンチに腰をおろし、なんとなく、少女の寝顔を見る。

とても穏やかな顔をしていて、なんだか叶宇の方まで和やかな気持ちになるようだった。

照りつける夏の陽射しは熱いが、そのぶん時おり吹く風が肌に心地よい。

隣ですやすやと寝ている少女を見ているとさらに心が落ち着いて

きて、まるで時間が止まってしまったようにさえ感じる。

元来ぼんやりとしていることが多い叶宇だが、普段のそれは無益に過ぎていくだけの空虚な時間なのに対し、少女と一緒にいる時間は何かが違った。

ぼうつとしていること自体に変わりはないのに、少しだけ心が落ち着くような、不思議な気分だった。

そんな風にして、三十分ほどが過ぎただろうか。

少女は目を覚まし、緩慢な動作で身体を起こした。

「あ、目が覚めた？」

声をかけてみる。

少女はきょとんとした顔でゆっくりと周囲を見回している。自分の置かれた状況を把握しようとしているようだ。

その後、叶宇の方を向く。そして叶宇を見るなり――

「え、ちょ、ちょっと、どうしたのいきなり！」

はし。っと、少女は叶宇に抱きついてきたのだった。

抱きついたといっても勢いよくしがみつくのではなくゆっくりとしなだれかかるように。

それ故にどう対応していいかわからず叶宇はされるがまま、抱きつかれてしまったのだ。

「と、とにかく落ち着いて！　落ち着いて！」

一番に落ち着くべきなのは叶宇自身なのだが、行動は正反対に慌

てふためいている。

困惑する叶宇に構わず、依然として少女は胸のあたりへ頼ずりをしている。

ぎゅっと叶宇の上着を掴み、まるで親に甘える子供のようなだ。

（とにかくまずはよく落ち着こう……。深呼吸をしよう……。すーはー……。って、ん？）

妙な感触に気づき、叶宇は自分でも驚くほど急に冷静になった。落ち着いたというよりは、さらなる驚きに面食らって一時的に思考が停止しただけなのだが。

（これは……？）

叶宇の脇腹のあたりに、柔らかな感触が押しつけられている。それは布一枚にしか隔てられていない少女の柔らかな肌の感触だ。華奢で、さらに小柄ではあるが、それでも少女の持つ女性らしいやさやかな肉付きは、確かに感じられた。

つまり、少女の小さな胸が当たっているのである。

そのうえ胸の感触が妙に直接的に伝わってくる。

とにかく柔らかく、また少女の体温が低いせいも、ひんやりとした感覚まで伝わってくる。夏で薄着だからといっても、ここまではつきりと感じられるものなのだろうか。

叶宇は改めて少女のことをよく見てみることにした。すると、

（も、もしかして、文字通りシャツ一枚しか着ていない！？）

原因は少女の服装にあったのだった。少女が身につけている衣服は大きなシャツ一枚だけであり、他には何も無い。中は裸なのだ。外見上シャツ一枚に見えるだけで、中には何かしらの下着などを身につけていると思うていた叶宇にとってそれは大きな誤算であった。

「と、とにかくいったん離れて！ 誰かに見られたらまずいよ！」

男子高校生がシャツ一枚の少女に抱きつかれている様子を誰かに見られるのは、何らかの誤解を生みかねない。

相手が女の子であるため無理矢理に突き放すわけにもいかず、叶宇は必死に懇願するが、少女の頬ずりが止む気配はない。

慌てふためく叶宇と、そんなことは気にも留めずじゃれついてくる少女。

そんなふたりの間に、ひとつの影が降りた。

「——あれ、叶宇くん。何してるの？ こんなところで」

「え」

はっとして叶宇は声のした方を向いた。

最初に綺麗な脚が目に入り、視線を上げれば健康的な太腿が覗くキュロットスカートが見えた。さらに視線を上げ、上半身を通り過ぎ、顔を見れば、

「あ、羽乃……」

目の前には叶宇の同級生、舞坂羽乃まいさかはねのがいた。

彼女とは家が隣同士ということもあり、小さい頃から付き合いがある。いわゆる幼馴染でもある。

夏休みのため学生服ではなく高校生の女の子らしい活動的な私服を着ている。

リボンで束ねた茶の髪を揺らしながら、首を傾げるようにして羽乃が問い掛けてきた。

「公園の前を通りかかったら叶宇くんがいたから、声をかけてみようかなーって思ったんだけど……。もしかして、お取り込み中？」

「と、取り込んでません！」

「でも女の子と公園のベンチでイチャイチャと……」

羽乃は「ほら」と言いながら指さす。依然として叶宇に抱きつきっぱなしの少女を。

「これは誤解なんだ！」

「そんな焦らなくても、叶宇くんにどんな趣味があってもわたしは口出さないよ。犯罪じゃなければ。……。あ、でも、ちょっとこれは危ないかな……？」

「それが誤解なんだってば！」

叶宇は羽乃にここまでの経緯を説明した。

公園の奥の雑木林で少女を見つけ、寝てしまった彼女をとりあえず公園へ運びベンチで寝かせていたこと。

そして少女は目を覚ましたのだが、なぜか妙に懷かれてしまった

こと。

「なるほどなるほど。そいつは難儀だねえ」

叶宇たちの様子を訝しげに見ながら、羽乃は顎に指を当てて考え込むような素振りを見せた。

その後、今度は膝に手をついて前屈みになり、少女の様子をじっと見つめる。

「どうして叶宇くんは、この子に気に入られちゃったんだろうねえ」

「さあ……。ぼくにもさっぱりなんだ。ぼくはこの子と面識はないんだけど……」

「それに、足の鎖が気になるよ。だって普通の女の子は拘束具を付けながら外でお昼寝はしないもの」

「そうだよね」叶宇は苦笑する。

「うーん、やっぱり見ない子だなあ。銀髪の小さい子なんていたらすぐに街の有名人になっちゃいそうなのに。ねえねえ、あなたどこの小学校かな？ それとも中学生？」

「……………」

羽乃が優しく問いかけるが、少女はやはり無言のままだ。羽乃をじっと見つめた後、結局元通り、叶宇に抱きついてしまう。

「最初からずっとこうなんだ。ぼくが話しかけたときも何も答えてくれなくて。機嫌が悪いわけじゃなさそうなんだけど」

「うーん、まったく喋ってくれず……かあ。こいつは難儀だなあ。
……あ。もしかして、外国の子なのかな？　だから日本語がわから
ないとか！」

羽乃は閃いたとばかりに人差し指を立てる。叶宇も一瞬納得しか
けるが、やはり疑問は浮かんでくる。

「外国の子だから迷子になっちゃったっていうのは頷けるけど……。
だとしても何かしら言葉を発することくらいはできると思うんだ。
日本語がわからないとしても、だからといって母国語すら喋らな
くなるのはおかしいよ。それに足の鎖の理由もわからない。なんで
ぼくに懐いてくれてるのかもわからないし」

「それもそうだねえ……」

再び二人は考え始める。長い沈黙が降りるがこれといって妙案は
浮かばない。

と、羽乃は考え込むような表情を一変させて、ぱつと明るい顔に
なった。

「ねえねえ。考えてもわからないんだし、とりあえずここでこの子
と遊んであげるなんていうのはどうかな？　そのうち、むかえが来
るかもしれないし」

戸惑いつ放しの叶宇とは対照的に、羽乃はどこか楽しげである。
羽乃は少女の頭を撫でながら、

「ほら、この子かわいいよう！　お人形さんみたい！　それに叶宇
くんにしがみついているのも甘えん坊な妹って感じでさ」

羽乃はにこやかに少女を愛でる。少女の方もそれが嬉しかったのか、羽乃に対しても柔らかな表情を見せるようになった。

「ぼくとしては、ちょっと戸惑うんだけど……。でも、そうだね。誰かこの子を知っている人が来るかもしれないし、ここで時間を潰そうか」

「うん、そうしましょ。ほら、おねえさんと遊ぼー……って」

そこで羽乃は優しいげな笑みを一変。頬を引きつらせ、硬直させた。「カ、カナ、カナウくん……」

少女の頭を撫でた体勢のまま動かず、声は震えている。

「どうしたの、羽乃？」

「ど、どうしたのじゃ、ないよ……。こ、この子さ……」

そういつて羽乃は、半ば奪うようにして少女を叶宇から引き離れた。

最初こそ少女は抵抗しようと叶宇の上着を掴んだが、すぐに手を離し大人しく羽乃に身体を預ける。

羽乃は少女を地面に下ろすと、次に少女が着ている大きなシャツの襟を指でつまんだ。

そして、叶宇には見えないように身体でブロックしながら、なにやらもぞもぞと動き出す。どうやらそつと少女のシャツを引っ張って、上から中を覗き込んでいるらしい。

「や！ や！ やっぱり！ カ、カナ、カナウくん！」

「え、な、何。いったい何が……」

「いったい何が……じゃないよ！　この子、シャツ一枚しか着てないじゃない！」

羽乃は慌てふためくようにして、少女を指さしながら叶宇に言い放った。

「え。ああ、うん。それにはぼくも困ってて。実は最初から――」

「カ、カナウ、叶宇くん……こ、こんな、白昼堂々と……！　いくら女の子が自分に懐いていて、しかも何も文句を言わないからって、これ幸いにとこんな格好をさせるのはいけないことだよ！　許されないよ！　難儀すぎるよ！」

叶宇の返答には耳も貸さず、羽乃は表情を強張らせながらまくし立てる。

「あ、あのー……羽乃？」

「そりゃあ、男の子はこういう格好が好きなのもかもしれないけどさ！　興奮するのもかもしれないけどさあ！　でも、叶宇くんは、そんな人じゃ、ないと思ってた……」

羽乃は哀しそうに瞳を潤ませ、しゅんとしている。

「ちょ、ちょっと待って羽乃！」

慌てて叶宇は立ち上がり弁解を試みる。

「ほへ？」羽乃はきょとん顔だ。

「べつにこの格好をさせたのはぼくじゃない！　最初に会ったとき

からこうだったんだよ。だから抱きつかれるのに余計困っていたわけ」

数秒、羽乃は真顔に戻り、瞑想するように目を閉じながら腕組みをする。

んー……と唸り、

「あ、なるほど。ご、ごめんねー。わたしの誤解だったよ。てつきりシャツが大きいだけで中にはちゃんと着ているんだと思っていたの。でも近づいてみたら違和感があって気になったから確認してみたら……。まさかと思っていた光景が目飛び込んできちゃったから、びつくりしちゃって、あはは……。いやあ、こいつは難儀だったねえ」

頭を掻きながら弁解する羽乃を、叶宇はじとつとした目つきで見た。

「ぼく、変態に間違えられた……」

「ごめんごめん！　だつてさ、叶宇くん、この子に抱きつかれても、されるがままだったんだもの。てつきり困惑しながらもそれさえ楽しんでしまっているのかと」

「そんなわけないでしょ！　無理矢理引き離すわけにもいかないから現状維持せざるをえなかったんだよ」

「本当にそうなのかなあ。それじゃ、叶宇くん。もしも、わたしが裸に大きなＴシャツ一枚で嬉しそうに抱きついてきても抵抗しない？」

「え。そ、それは……」

一瞬、叶宇は羽乃のＴシャツ姿を想像した。
もちろん少女の格好と同じ、膝上まで丈がある大きなＴシャツ一枚である。

だぼつとしたＴシャツを着て、胸のあたりは皺を作りながら豊かな起伏を生み、裾からは健康的な太腿がギリギリまで覗いていて……にわかに、叶宇の脳内にはピンク色の背景と、笑顔で近づいてくる羽乃の映像が浮かび上がる。

叶宇の顔は一気に紅潮した。

「あ、ダメ！ 想像しちゃダメ！ ノー・モア・イマジン！」

羽乃はぽかぽかと叶宇の頭を叩いた。

「い、痛いっ。そ、そんな！ 羽乃の方から言ってきたんじゃないか！ ぼくだって想像しようと思ってしたわけじゃ……」

「ほ、本当に想像してたの！？ ダメだよ、冗談で言ってみただけなんだから！ 取り消し！ 今の取り消し！ そ、そんなことより女の子のことだよ、叶宇くん！」

墓穴を掘ってしまった羽乃は強引に話題を変え、少女の方を見た。

叶宇もそれに倣う。

少女はベンチに置かれたノートを眺めていた。

「何見てるのかなー」

羽乃がにこやかに、少女へ問い掛けた。少しお姉さん気分のようにだ。

少女が見ているのは、叶宇がレポート作成のためのメモとして使

つていたノートだった。叶宇が見つけた花の絵や、見つけた場所、特徴や気付いたことなどが細かく書き込まれている。

羽乃も少女の隣にしゃがんでノートを見る。

「これ、叶宇くんのノートだね？」

「うん。それは夏休みの宿題に使おうと思ってとっているメモなんだ。街に咲いている花について調べようかなって」

「へえ、なるほど。叶宇くん、けっこう絵がうまいんだね」

「写真も撮ってあるんだけどね。一応スケッチもしておこうかと思っ
つて」

「ふんふん」

羽乃は頷き、そして少女に、

「あなたは、どのお花が好き？」

ノートに描かれた花を順に指さして尋ねた。といっても、まだ三種類ほ
どしか書かれていないので、選択肢は少ないのだが。

「……………」

少女は首を傾げ、数秒考え込むような様子を見せたあと、ノートに描かれた花のうちのひとつを指さした。

「へえ、これが好きなんだ。可愛い花だねえ。えーっと、この花は……………」

「アマリリスだよ」

羽乃の言葉を継ぎ、叶宇が説明する。

「ヒガンバナ科の花で、夏になるとユリの花に似た花びらをつけるんだ。色は赤とか白、それに桃色だったかな。ぼくが見つけたのは白い花だった。この公園の隅の方に咲いていたんだよ」

「ふうーん。そういえば、公園に入るときに見かけた気がするなあ」
羽乃は合点し、

「そっかあ、あなたはアマリリスがお気に入りなんだあ。それじゃあ……」

そう言って少女の頭を撫でる。

「この子をアマリリスちゃんって呼ぶなんてどうかな？」

「この子に名前をつけるの？」

「名前というかニックネームだね。これから一緒に遊ぼうっていうのに呼び名がないのは不便でしょう？ だから、この子が気に入った花の名前にしてみたの。この子も肌の色が白いし、髪も銀色でそれっぽいといえればそれっぽいし、服も白いシャツだしさ。どう、アマリリスちゃん？」

羽乃はにこりと少女に呼び掛けた。

しかし少女は嫌そうな顔こそはしていないものの、どこかしっくり来ないといった感じの顔をしている。

「うーん。あまりこの子の琴線には触れず、かあ」

羽乃は残念そうに呟いた。

「アマリリスだと人の名前としてはちょっと長いしね。もうちょっと短くしたらどうだろう」

少女にニツクネームを付けるという羽乃の案自体には賛成で、叶宇も意見を出す。

「アマリーなんてどうかな」

「外人っぽいけど、この子には似合わない気がするなあ。どう、アマリーちゃん？」

羽乃は再び少女に尋ねる。しかし、少女の反応は芳しくない。
「ダメだねえ。もうちょっと可愛い感じがいいかも」

羽乃の案を受け、叶宇は再度考える。

「それじゃ……リリ、なんてどうだろう」

「リリちゃん、かあ。うん、それいいかもしれない！　ねえねえ、どうかなリリちゃん」

そう羽乃に問われた少女は、何度か叶宇と羽乃の顔を交互に見た。そして、にこりとほほ笑んだ。

「気に入ってくれたみたいだね」

「それじゃ決まり！　さ、一緒に遊びましょ。リリちゃん！」

ハメドが意識を取り戻したときにはもうビル周辺に少女の姿はなかった。

まだ少し痛む頭を押さえながら立ち上がり、辺りを見回す。

「ちつ……。逃がしちゃったか……」

いるのはハメドを取り囲んでいた警備員たちだけ。

彼らは未だに気絶したままだが、少女はどこにも見当たらない。

おそらくハメドと警備員たちが気を失っている間に、ひとりで逃げ出したのだろう。

「まあ失敗しちゃったもんは仕方ねえか……。今は逃げるのが先だ」

気絶してからどれだけの時間が経っているのかはわからないが、バレラ社の地下にある研究所を襲撃した張本人がそのビルの前で気絶していたというのに、まだ誰も捕らえにきていないのは幸いだっ

「俺や警備員だけじゃなく、ビルの中にいる人間まで気絶していたりしてな……。俺の場合、多少は『精神波』に耐性があるから、こいつらより先に目が覚めたってわけか」

呟き、皮肉そうに鼻で笑う。

そこへ一台の車がやってきた。

黒のセダンで、乗っているのは運転者の女性ひとり。

うまい具合に倒れている警備員たちを避けて進み、ハメドの前で

停止した。ドアが開き、

『はい、ハメド』

女が降りてくる。

長いストレートの金髪。外人のようなメリハリのある端正な顔立ち。率直に言えば、大人の色香を多分に含んだ典型的な美人だ。

コート、ワンピース、ストッキングからハイヒールまですべて黒という格好は、同じく黒一色で服装を統一したハメドと酷似している。

「よう、ステビア。わざわざむかえに来てくれるとは気が利くじゃねえか」

ハメドはコートについた汚れを払い、サングラスに指を当て位置を正す。

『どういたしまして。いつまで経ってもアナタが待ち合わせの場所に来ないからむかえにきたのよ。それで、作戦はうまくいったのかしら？』

女——ステビアはそう問いかけた。

しかしその声は、彼女の口から発せられているわけではなく、ハメドの脳内に直接響くテレパシーのようなものである。

「いや。残念ながら失敗した。途中までは順調だったんだが、『あいつ』が『強精神波』を発生させた。ただの『精神波』さえ出せないはずなのに驚いたぜ。おかげで俺も、ここに転がっている警備員も全員ダウンだ。もしかしたらビルの中にいる奴らまで倒れているかもしれないねえ」

言いながらハメドは後方にそびえるバレラ社のビルを流し見たあ

と、彼女の方へと歩み寄った。

ステビアは、フッフとおかしそうに笑い——声は出さずに表情で笑っている——助手席のドアを開け、ハメドを招く。

『未熟なゴストでも感情が昂ると精神波を発生させることがあるの。アタシも根本的にはあの子と同じゴストだから、なんとなくわかるわ。きつとアナタが恐くてビックリしちゃったのよ』

「そうかい。そいつは心が痛むぜ」

ハメドは演技めいた動作で顔に手を当て悲しさを表現すると、車へ乗り込んだ。

運転席にはステビアが、助手席にはハメドが座る。
すぐに車は発進する。

「あいつはひとりで逃げ出したはずだ。まだそう遠くへは行っていないだろう。俺がバレラ社に侵入してからどれくらい時間が経った」

ハメドの問いに、ステビアは脳へ直接響く声で答える。

『一時間とちよつと、つてところかしらね。きつとまだこの街のどこかにいるんじゃないからしら』

「だろうな。仮に一時間あったとしても、土地勘もないガキの足で街の外まで走るのは不可能だ」

赤信号に差し掛かった。車が停止する。

「なあ、ステビア。あいつはビルの前で一度、『強精神波』を発生

させたわけだが、それをきっかけに自分の力を扱えるようになったと思うか」

ハメドの問いに、ステビアは少し考えるように間を置いてから答えた。

『それはないと思うわ。何か新しいことができるようになるときで大抵きっかけが必要なものだけど、でもきっかけだけじゃ充分ではない。ちゃんと本人が自覚していないといけないわ。』

無我夢中でやってただけじゃただの偶然で終わってしまう。あの子はまだ何も知らない。きっと今も、自分の秘めている力なんて何も知らず、何にも気づかず、街を逃げ惑っているわ』

信号が青に変わった。車は再度発進する。

大通りへ出て、ステビアは快調に飛ばしていく。

『とりあえず、いったん休憩にしましょう。ビルの地下にある秘密の研究所を襲撃なんて荒事をした後じゃ、お腹が空いちちゃって人探しなんてできないわ』

「お前は外で待っていただけじゃねえか。でもまあ、俺も少し疲れた。あいつを捜すのは夕方からにしよう。正確な居場所がわからないんじゃないか聞き込みをするしかねえからな。ある程度時間を置いてからの方が情報も集まりやすいだろう」

ハメドは運転席の脇にあるデジタル時計を見る。
表示は、七月二十日、午後一時半だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6013y/>

夢見のゴスト

2011年11月18日20時14分発行